

招聘 研究員

氏名	ロミーナ バルトッチ (Romina BARTOCCI)
所属機関等	フランス国立高等研究院 東アジア文明研究センター
受入期間	2019年9月23日～2019年10月13日
指導教員	内田青蔵 (チューター：野々村明佳里)
研究課題	古代日本の八角墳に関する考古学的、建築学的研究



日本の八角墳

ロミーナ・バルトッチ

古墳時代(紀元300～600年)の終末期に古墳の新しい形態が登場した。考古学者が「八角墳」と呼ぶ古墳である。八角墳は八角形の平面、階段状のピラミッドのような複数の階層を特徴とする墳墓で、それまでになかった形状である。

一見すると、八角墳は、正方形の基底部に円形の頂部を持つ上円下方墳が進化したもののように思える。八角墳が登場したのは、大型の天皇陵である大陵の築造が下火になり始めた6世紀である。

同じ時期に、複数の小古墳(塚)が密集して存在する群集墳の発達が見られる。群集墳は大和の貴族に一般的に見られる墳墓となる。したがって八角墳は、鍵穴の形をした旧来の前方後円墳から切り替わって登場した、別の古墳形態と解釈することができるだろう。

八角墳の登場は、政治的、文化的、社会的な状況が進展する時代とも時期を同じくしている。6世紀であるが、この時代は最初の国家と考えられるヤマト政権が形成された時期と重なる。このヤマト政権がのちに発展して中央集権的な朝廷の支配のもとに形成された天皇国家となる。

当時、日本の中央地域の宮廷は領土の大半に勢力を築き、朝鮮王朝との文化的、経済的、政治的な交流の中心となっていた。この時期は、大量の文化や人が朝鮮半島から流入した時期でもある。朝鮮半島から渡来した文化や人材は社会の全ての階層に浸透し、日本列島の暮らしのあらゆる面に大きな変化をもたらした。政治体制の改革、朝鮮の文化や人材の存在が日本社会を大きく進化させる決定的要因となったことは間違いない。

6世紀と7世紀は八角墳の築造が行われた時期であるが、この時期を通じて葬送建築に驚くべき革新が起こったことに注目している。古墳の規模は、大型の前方後円墳と比較すると、どんどん縮小されていった。同様の大きな変化は、仏教の普及に伴う宗教の慣習や、政治体制、行政機構にも見ることができ、社会の激変は646年の大化の改新で頂点に達した。

この視点で見ると、八角墳の起源や発達は、ヤマト政権の誕生から官僚国家になるまで—この過程は7世紀後半までには完了したと考えられる—に影響を及ぼしたさまざまな変化や動乱が、葬送慣行として表れたものと考えることができる。

八角墳の遺跡—立地と環境

八角墳の最初の解釈では、この形態の古墳は近畿地方に特有のものと思われていたようである。考古学者や歴史学者は、当初、八角墳が天皇やその側近など最高位の人々のための墳墓だと考えていた。実際、舒明天皇(593～641年)、天智天皇(626～672年)、天武天皇(622(又は631)～686年)、天武天皇の妻の持統天皇(645～702年)、文武天皇(683～707年)は八角墳に埋葬されている。

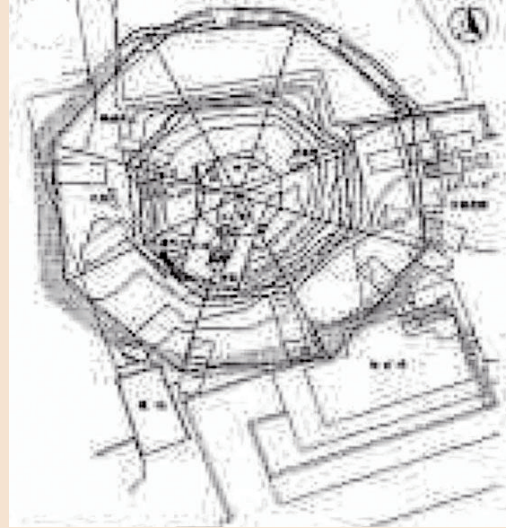
しかし、八角墳は近畿以外の日本各地でも見つかっている。経塚古墳(山梨県)や、籠原浦古墳群(埼玉県)などが特に有名である。

これはその地方の社会構造や葬送慣習の違いを示している可能性がある。また、亡くなった人物が誰か、その人物がその場所で当時どのような地位にあったのか、あ

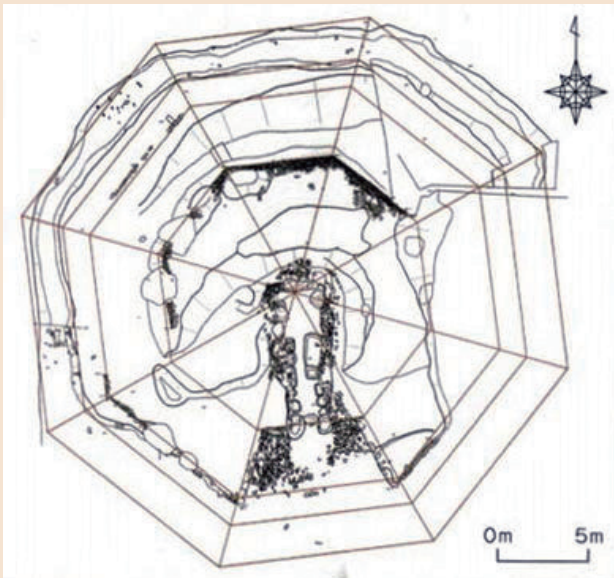




● Fig. 1



● Fig. 2



● Fig. 3



● Fig. 3.1

るいは権力構造のなかでどのような役割を果たしていたかということに関連する可能性もある。残念ながら、十分な仮説を立てられるだけのデータが集まっていないため、今後さらに研究が必要である。

今までのところ、このように大きな違いがある理由について、統一した見解は得られていない。

日本の八角墳

日本では、八角墳はおおむね正八角形に再現されているが、各辺の長さや内角の大きさが等しい正八角形の古墳はほとんど見つかっていない。

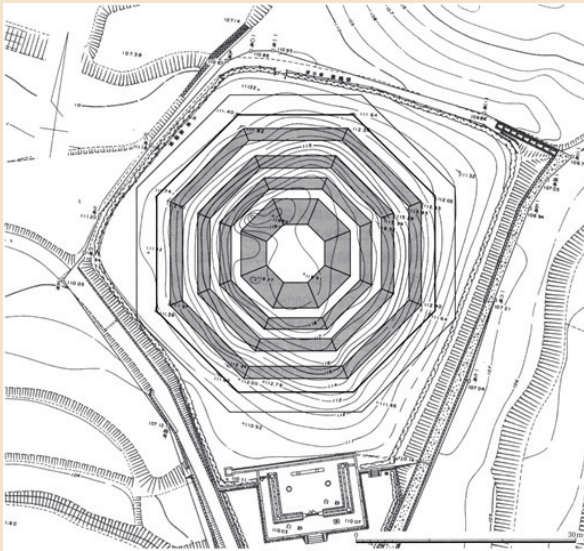
注目すべき例は経塚古墳である。経塚古墳は、外周 38.99m、対角長 12.5m、高さ 2.2m の八角形で、東から

西にかけて 0.3m 高くなっている。自然の傾斜地に沿って造られており、主体部は羨道と玄室で構成されている (Fig. 1)。

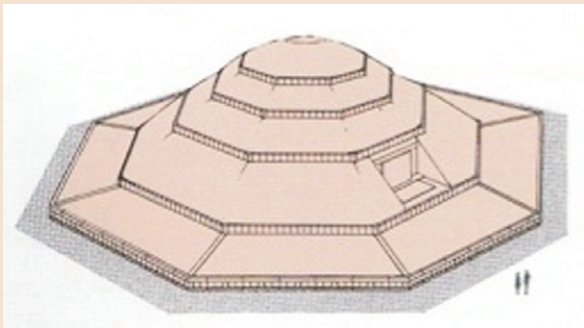
東京都多摩市にある稲荷塚古墳 (Fig. 2) や群馬県にある三津屋古墳 (Fig. 3) の場合と同様、経塚古墳でも各辺や内角の違いは最小限と思われる。三津屋古墳では、八角形の形がはっきりと分かる (Fig. 3.1)。梶山古墳 (鳥取県) の場合、各辺の長さや内角の大きさの違いはこれらの古墳より大きい。古墳の中には外周が歪んでいるため八角形だと分からないものもある。その一例が吉田古墳である。この古墳は構造が崩壊して外周がほぼ完全に消失しているため、考古学者は何角形か判断できず、長い間、単に「多角形」だと考えていた。2005 年になってようやく古墳の原型が復元された。

もう一つ注目すべき例は、天武・持統天皇が合葬されている野口王墓古墳 (奈良県) である (Fig. 4)。この古墳は八角形であることが昔からはっきりと分かっている唯一の古墳である。





● Fig. 4



● Fig. 5

八角墳のなかにはもっと複雑な構造を持つと思われる古墳もある。中山荘園古墳（兵庫県）や、天智天皇陵である御廟野古墳（京都近郊）に複雑な構造を見ることができる。

このようにさまざまな八角墳が存在することは、八角墳が他の古墳に比して、決して重要性が低いわけではないことを証明している。御廟野古墳のように規模が巨大な八角墳では、被葬者が多数の労働者や熟練土木技術者を動員できる権力があつたことを示している。しかし、まだ多くの疑問が答えの見つからないまま残されている。

結論

八角墳は国家形成と王権危機の時代に出現したと思われる。6世紀は継体天皇の統治に代表される時代であり、天皇家の主流の血統に変化があつたことを示している。また、日本における権力の本質や、統治王朝の役割・位置づけに根本的な変化があつたことが認められる時代でもある。支配者層が埋葬される葬送建築の形態の

変化は、政治的変化が起ころうとしている兆しだと解釈できるのだろうか。それとも、社会政治・文化・宗教に新たな状況が生じたことの現れなのだろうか。これらの出来事は密接につながっていると考えてよいのか、それとも関連は表面的なものにすぎないのだろうか。

一部の研究者にとって、八角形は仏教の普及と関連している。仏教では数字の8が非常に大きな象徴的意味を持っている。八大菩薩、八正道、仏陀の命の象徴である仏舎利、法輪に相当する神聖な蓮の花弁など、これら全てに数字の8が入っている。

しかし、8という数字は道教にも見られる。道教は当時既に日本に導入され、特に皇室の正当性を示すための儀式に道教が取り入れられていた。仏教も道教も当時の朝廷に信奉され、天皇家及び皇室制度そのものを正当化し保護する役割を担っていたことからすると、この二つの宗教が担った役割が葬送建築の変化をもたらしたのだろうか。また、八角形の外観は仏教だけ、あるいは道教だけに関係するのではなく、当時の朝廷や貴族が二つを習合させた結果という可能性もある。

これらの疑問はまだ完全に解決されていない。八角墳の研究は現在も続けられている。形態、構造、築造の時期や場所が多様であることや、八角墳が登場したタイミング、つまり文化的、政治的な大変革が多数起こった時期と同時代であることなどから、非常に特殊だと思われるテーマが、実は、日本の政治・文化史についての理解を深める大きな可能性を秘めている。

【参考文献】

- 明日香村教育委員会文化財課編「牽牛子塚古墳発掘調査報告書—飛鳥の削り貫き式横口式石槨墳の調査」『明日香村文化財調査報告書』第10集，明日香村教育委員会，2013，304p
- 岸本直文「倭における国家形成と古墳時代開始のプロセス」『国立歴史民俗博物館研究報告』第185集，2014，pp.369-403
- 樽園男『方格法の渡来と複合形古墳の出現—古墳時代の成立とは』築地書館，2009，261p
- 白石太一郎『古墳とヤマト政権—古代国家はいかに形成されたか』文藝春秋，1999，206p
- 白石太一郎『近畿地方における大型古墳群の基礎的研究』六一書房，2008，606p
- 吉岡弘樹「経塚古墳についての予察」山梨県立考古博物館，山梨県埋蔵文化財センター『研究紀要』vol.12，1996，pp.19-44

【画像リスト】

- Fig.1 経塚古墳（7世紀前半）山梨県笛吹市，出典：吉岡弘樹「経塚古墳についての予察」山梨県立考古博物館，山梨県埋蔵文化財センター『研究紀要』vol.12，1996
- Fig.2 稲荷塚古墳（7世紀）東京都多摩市，出典：明日香村



教育委員会文化財課編「牽牛子塚古墳発掘調査報告書」『明日香村文化財調査報告書』第10集，明日香村教育委員会，2013，304p

Fig. 3 三津屋古墳（7世紀）群馬県吉岡町。出典：ググっとぐんま公式サイト <http://.gunma-dc.net>

Fig. 3.1 三津屋古墳（7世紀）群馬県吉岡町。出典：ググっとぐんま公式サイト <http://.gunma-dc.net>

Fig. 4 野口王墓古墳（7世紀）奈良県明日香村。出典：明日

香村教育委員会文化財課編「牽牛子塚古墳発掘調査報告書」『明日香村文化財調査報告書』第10集，明日香村教育委員会，2013，304p

Fig. 5 野口王墓古墳。奈良県明日香村。出典：明日香村教育委員会文化財課編「牽牛子塚古墳発掘調査報告書」『明日香村文化財調査報告書』第10集，明日香村教育委員会，2013，304p

Octagonal *kofun* in Japan

East Asian Civilisations Research Centre Romina Bartocci

In the last part of the Kofun Period, 古墳時代, (300 AD–600 AD) a new form of monumental tomb appeared, called by archaeologists “octagonal tomb”, *hakkakufun* 八角墳. The octagonal *kofun* is a tomb characterized by an octagonal plan and a structure on several architectural levels, as would be a step pyramid. This is a new geometric shape.

At first, the octagonal *kofun* seems to be an evolution of the mound with a square base and a circular apex, the *jōenkaōfun* 上円下方墳. The octagonal tomb appears when the construction of the great imperial mausoleums, *dairyō* 大陵, begins its decline, in other words the 6th century.

In this same period, we see the development of clusters of mounds, *gunshūfun* 群集墳, which come to constitute the tombs typical of the nobility of Yamato. The octagonal tombs could therefore be interpreted as a breaking point with the old model of *zenpōkōenfun* 前方後円墳, the monumental keyhole-shaped *kofun*.

The advent of the octagonal plan also coincides with an evolution of the political, cultural and social context: the 6th century is the period in which we see developing what we consider the first state of Yamato, destined to evolve in an empire under the control of a centralized court.

At the time, the Court of the central region established its influence on most of the territory and became the main actor of cultural, economic and political exchanges with the Korean kingdoms. The period was also marked by a great cultural and human influx from the Korean peninsula, which permeated all strata of society and

brought remarkable changes in all aspects of life in the Japanese Islands. The reform of the political structure and the Korean presence were undoubtedly decisive factors in the major evolution of Japanese society.

Throughout the 6th and 7th centuries, during which the construction of octagonal *kofuns* takes place, we note remarkable innovations in funerary architecture, whose structures become more and more reduced in size if compared to the great *zenpōkōenfun*. Similar changes can be noted in religious practices, with the increasing rise of Buddhism, and in the political and administrative structure, whose evolution culminated in the great Taika Reformation of 646.

From this perspective, the origin and development of octagonal tombs could be considered as the expression in funerary practice of the changes and upheavals that affected the Yamato polity from its origins to it becoming a bureaucratic state, a process which can be considered completed by the second half of the 7th century.

The remains of the octagonal *kofun*: location and environment

According to the first interpretation of this form of funerary architecture, it appears to have been specific to the Kinki region. Archaeologists and historians first assumed that it was an architectural model reserved for people of the highest rank, specifically emperors and their close *entourage*. Indeed, the emperors Jomei 舒明天皇 (593–641), Tenji 天智天皇 (626–672), Tenmu 天武天皇 (622 or 631–686), his wife Jitō 持統天皇 (645–703) and finally Monmu 文武天皇 (683–707) were buried in



octagonal *kofuns*.

However, examples of octagonal tombs have been found in other regions of Japan, notably the tomb of Kyōzuka 経塚古墳, located in the prefecture of Yamaguchi, or the cluster of Kagohara-ura 籠原裏古墳群, in the Saitama prefecture.

This could show a difference in the local social structure or funerary tradition. It could also be related to the identity of the deceased, or their position and/or function in the power structure of the period and place. Unfortunately we've been unable to gather sufficient data allowing us to formulate a more substantial hypothesis: further research is necessary.

Until now, no *consensus* has been reached as to explain the reason of this remarkable difference.

The octagonal plan in Japanese tombs

In Japan, the octagonal layout is reproduced mainly in its regular form, although the length of the eight sides and the width of the internal corners are almost never found to be of equal size.

A remarkable example is the Kyōzuka tomb. It has an octagonal shape with a perimeter of 38.99 meters, a diagonal of 12.5 meters, a height of 2.2 meters and an elevation from east to west of 0.3 meters. It is built following the natural slope of the land and it is made up of a main structure, formed by the corridor and the burial chamber (Fig. 1).

This difference inside length or angles can be minimal, as in the case of the tombs of Inarizuka 稲荷塚古墳, (Fig. 2) in Tama city, Tokyo, and of Mitsuya 三津屋古墳 in Gunma prefecture (Fig. 3) where the shape of the octagonal layout is clearly visible (Fig. 3.1). These differences are more significant in the case of the tomb of Kajiyama 梶山古墳, in the prefecture of Tottori. The deformation of the perimeter in some cases prevents the perception of the octagonal plan. The tomb of Yoshida 吉田古墳 is an example. For a long time, archaeologists defined this tomb simply as “polygonal” without being able to determine the exact number of sides, because of the almost total loss of the perimeter due to the collapse of the structure. It was not until 2005 that they successfully restored the original layout of construction.

Other notable example is the tomb of Noguchi ōbo 野口王墓古墳, (Fig. 4) attributed to Tenmu and Jitō, in Nara prefecture (Fig. 4.1). The latter is the only tomb whose octagonal shape has been recognized since antiquity.

In some octagonal tomb, the structure appears more complex. This can be seen in the tombs of Nakayama sōen 中山荘園古墳, in Hyōgo prefecture, and in that of Gobyōno 御廟野古墳, the tomb attributed to Emperor Tenchi, near Kyōto.

The rich variety shown in the layout of these mausoleums proves that octagonal tombs were not a secondary or lesser structure compared to the other mounds. As shown in the last example, their scale can be impressive, meaning that the occupant was able to marshal the labor of numerous workers and skilled constructors. However, we are left with multiple unanswered questions.

Conclusion

The octagonal tomb seems to emerge during a period of state formation and dynastic crisis. The 6th century is marked by the reign of Keitai, which represents a change in the dominant bloodline within the imperial family. It is also a century when we can discern a radical evolution in the very essence of power in Japan, as well as in the role and position of the ruling dynasty. Can the change of form in the funerary architecture of the *élite* be interpreted as a sign of the impending political changes? Or is it a symptom of a new sociopolitical, cultural and religious context? Can we suppose that these phenomena are closely linked or is it only a superficial correlation?

For some researchers, the octagonal form is linked to the spread of Buddhism, given the remarkable role that the number 8 plays in Buddhist symbolism: the great bodhisattvas, the Noble Eightfold path, the great *stupas*, the symbols of the life of the Buddha as well as the sacred lotus petals, which are the equivalent of the wheel of Dharma, all bear the number eight.

However, this number is also found in Taoism, which was already present in Japan, especially in the rituals dedicated to the legitimization of imperial power. Knowing that both Buddhism and Taoism practiced by the Court had among their function those of legitimizing and protecting the family of the emperor and the imperial institution itself, to which of these two religions do we owe the evolution in funeral architecture? It is also possible that the appearance of the octagon is not related Buddhism or Taoism singularly but is the fruit of a syncretism developed by the Court and the Nobility.

These questions have not yet been answered definitively. Octagonal tombs are the object of current studies.



The richness in form, structure, date and location, as well as the timing of their appearance, contemporary with a period of numerous cultural and political upheavals, show us how a theme that might appear extremely specific can in truth bear great potential for a better understanding of Japanese political and cultural History.

Bibliography

Excavation report in Kengoshizuka tumulus, Research report of cultural heritage in Asuka village, Asuka village Board of education, Asuka, Nara, Japan, vol. X, 2013, pages 304.

KISHIMOTO Naofumi, 岸本直文, « Wa ni okeru kokka keisei to Kofun jidai kaishi no puroseseu, 倭における国家形成と古墳時代開始のプロセス, (Kofun period start-up and nation-building process in Wa State) », Kokuritsu Rekishi Minzoku Hakubutsukan kenkyū hōkoku, 国立歴史民俗博物館研究報告, Bulletin of the National Museum of Japanese History, n° 185, 2014, p. 369–403.

KUNUGI Kunio, 榎國男, « Hōkakuho no torai to fukugōkei kofun no shutsugen: Kofun jidai no seiritsu to wa, 方格法の渡来と複合形古墳の出現: 古墳時代の成立とは, (Introduction of a coordinated system and appearance of mounds in compound form: The establishment of the Kofun period) », Tōkyō, Tsukiji Shokan, 築地書館, 2009, 261 pages.

SHIRAISHI Taichirō, 白石太一郎, « Kofun to yamato seiken: kodai kokka wa ikani keisei saretaka, 古墳とヤマト政権—古代国家はいかに形成されたか, (Kofun and Yamato administration: How the old nation was built) », Tōkyō, Bungei Shunjū, 文芸春秋, 1999, 206 pages.

SHIRAISHI Taichirō, 白石太一郎, « Kinki chihō ni okeru ogata

Kofungun no kisoteki kenkyū, 近畿地方における大型古墳群の基礎的研究, (Main research on groups of large mounds in the Kinki region) », Tōkyō, Rokuichishobō 六一書房, 2008, 606 pages.

YOSHIOKA Hiroki, 吉岡弘樹, « Kyōzuka kofun ni tsuite no yosatsu, 経塚古墳についての予察, (Prediction on the Tumulus of Kyōzuka) », Kenkyū Kiyō, 研究紀要, Bulletin de recherche, vol. 12, 1996, p. 19–44.

List of images

Fig. 1 Kyōzuka Kofun, Fuefuki City, Yamanashi Prefecture, first half of the 7th century. Source: YOSHIOKA Hiroki, 吉岡弘樹,

Fig. 2 Inarizuka Tomb Tama City, Tōkyō 7th century. Source: Excavation report in Kengoshizuka tumulus, Research report of cultural heritage in Asuka village, Asuka village Board of education, Asuka, Nara, Japan, vol. X, 2013, pages 304.

Fig. 3 Mitsuya Ancient Tomb, Yoshioka-cho, Gunma 7th century. Source: Gunma department site www.gunma-de.net

Fig. 3.1 Mitsuya Ancient Tomb, Yoshioka-cho, Gunma 7th century. Source: Gunma department site www.gunma-de.net

Fig. 4 Noguchi grave tomb, Asuka village, Nara 7th century. Source: Excavation report in Kengoshizuka tumulus, Research report of cultural heritage in Asuka village, Asuka village Board of education, Asuka, Nara, Japan, vol. X, 2013, pages 304.

Fig. 5 Noguchi grave tomb. Source: Excavation report in Kengoshizuka tumulus, Research report of cultural heritage in Asuka village, Asuka village Board of education, Asuka, Nara, Japan, vol. X, 2013, pages 304.

